国語問題

国語純化と基本語

土居光知

國語科學講座

—XII—

國語問題

國語純化と基本語

土居光知

株式會社
明治書院

國語科學講座

—XII—

國語問題

國語純化と基本語

土居光知

株式會社
明治書院

内容の見出し

國語純化と基本語

土居光知

端書き

私に與へられた題は「國語純化と基本語」でありますが、それを私は「基礎語と、言葉を整理して單純にすることの意味」と了解します。私は「基礎日本語」の組織を試み、神田區佐久間河岸三七番地六星館から、去る三月に本として公けにしましたが、こゝではこの私の試みの基礎になつた考へを短かくいひ表はしながら、日本語をいかにして整理すべきかといふことを考へてみたく思ひます。また私はこの論文全體を「基礎日本語」で書く自由を與へて下さることを願ひます。それはわづか一千語で何事でもいひ表し得ることの實際の例ともなると思ひます。

一　基礎語とは何か

基礎的な日本語とは何のやうなものでありませうか。基礎語とは日本の言葉を勉强する人が第一番に知るべきものでありませう。小學校に於いて言葉を教へる時、東京の言葉とか、大阪の言葉とか、ある特別な社會や團體の言葉と

か、過去の時代の言葉などを敎へることはないでせう。小學校では第一番に基礎的な、標準的な言葉を敎へます。朝鮮や滿州の人々、あるひは西洋人が日本語を勉强する時にも同じく基礎的な言葉からはじめます。基礎的な言葉と標準的な言葉とは同じでありませうか。高い敎育を受けた東京人の言葉は日本の標準的な言葉であるといふことができませう。しかし、それは非常にぼんやりした標準であつて、個人〳〵によつて使用する語の範圍が異なり、また言葉の數や種類なども定められてありません。このやうにぼんやりしたものを、そのまゝに基礎とすることはできません。基礎語とはよく整理され組織されたもの、その組織や語の選擇についても客觀的な確かさをもつて居り、段々に廣くされ、成長してゆく言葉の知識のよい基礎となるものであるべきであります。

基礎語の選擇は主觀的な個人の興味に支配されず、誰でもはつきり了解し得るやうな、科學的なし方によつて組織的になさるべきであります。さやうでないと、その選擇の基礎が他人によつて充分に了解されることがなく、多くの人々によつてその組織を改めてよりよくすることができません。

基礎語はそれ自身で一つの完全した組織であり、何事でもいひ表はし得ることが必要であるが、また標準語と聯絡してゐて、基礎語を使用し、讀み書きができるやうになつた人々は、その他多くの必要な語を取り入れ、言葉の知識を廣くかつ深くしてゆくための基礎とならねばなりません。基礎日本語とは日本語の知識を得ようとする人の第一の階段であり、完全な基礎であらねばなりません。

私は右に書き表はしたやうな考へを以つて基礎日本語の組織を作つてみました。基礎語は單純に個々の語の選擇ではなく、文體や文章の規則に關係しても基礎的なものを定め、それから一々の語の選擇をする必要があります。

二　文　體

日本語では話の言葉と、書く文章とは異なつてをります。

私はこれを汝に與へる。

彼はよく勉强する。

は書き表はす文體であり、

私はあなた樣にこれをさしあげます。

私はあなたにこれをあげます。

僕は君にこれをやるよ。

あの方はよくご勉强をあそばします。

あの方はよく勉强をなさいます。

あいつはよく勉强しやがる。

のやうなのは直接に口から出す言葉であります。話の言葉としては、尊敬や・親しみや・輕く見ることや・憎しみなどの感情を、聲の調節により、また特別な語により常に表すのであります。日本語は世界のうちで一番强く話す人の社會的階段を表す言葉でありませう。

話すことゝ書く文章とが全く同じである基礎的な文體として、私は「ます」・「です」・「せう」のやうな語を一々の文

章の終りに添へるが、他の部分は讀み書きの文章と同じである文體を取りました。この文體は私等が多くの人々の集りに對して話をするときに使用するものでありまして、個人に對する話と本に書く文體との中間にあり、いかなる時に使用しても不調和を感じません。これは個人的な感情なしに、たゞ、すべての人やものに對して尊敬の心もちを表す文體といふことができませう。今日ほど人々が尊敬の心もちをなくした時はありません。それ故に正しい尊敬の心もちを表はす文體を日本の言葉の基礎とすることは幼い人々の教育の上からも必要なことゝ考へます。

三　使用語の種類

文章が常に「ます」・「です」・「せう」のやうな語で終りとなるとすれば、それだけ長々しくなり、締りがなく、齒切れのわるい感じを與へることになります。しかし私は使用語の性質により文體を引き締るやうにしました。過去に於いて日本の基礎語を組織しようとした人々は、漢語をできる限り使用しないやうにし、その結果として、觀念的なことをいひ表すに不適當な文體にしました。私はこれと反對に、漢語を多く使用し、形を離れた思想をいひ表すに適當した、短かく、引き締まつた文體を得るやうにしました。

用ゐる――使用する
組みたてる――組織する
教へ育てる――教育する
換へる――交換する

おぼえる――記憶する
わかる――了解する
比べる――比較する
徹ふ――貫徹する
省く――省略する
選ぶ――選擇する

のやうな例に於て、漢語を使用すれば働きの語と共に「使用」・「組織」・「教育」のやうな名の語を取り得るのでありま す。私等がラテン語やギリシヤ語を勉强するとき、一番むづかしさを感ずるのは働きの語の變化でありますが、日本語に於ても四段變化・上二段・下二段・上一段・下一段變化のやうに多くの種類の働きの語があることが、日本語を非常にむづかしくして居ります。私は「住居する」・「組織する」・「教育する」・「勉强する」・「記錄する」のやうに、「し――する――すれ」と尾の部分が變化する働きの語を二百ばかり取り入れ、それを規則的變化の働きの語とし、その他の働きの語の數をできる限りすこしにすることにより日本語をたやすくしました。

しかしこのやうな働きの語を作るにも一つの標準があります。『うたふ・思ふ・聞く・知る・書く・いふ・泣く・作る・遇ふ・送る・拂ふ・買ふ・賣る・眠る・休む・置く・乘る・取る・もつ・握る・打つ・折る・切る・吸ふ・嗅ぐ・飲む・立つ・卷く・出す・歩む・入る・引く・押す・飛ぶ・ある・なる・開く・もらふ・織る』のやうな四段變化の語は、「思ふ」と「知る」とを取り去ると、すべて、肉體の直接な働きを表す語であります。英語に於いても

sing, think, hear, know, write, say, weep, make, meet, send, sweep, buy, sell, sleep, put, take, hold, heat. break, cut, smell, drink, stand, draw, fly, be, become, weave

などは不規則變化の働きの語であります。一般的にいふと、不規則變化の働きの語は、肉體の直接な働き、または單純な働きを表す語であつて、規則的變化の語よりも早い時に作られ、常に使用されて居つたが故に、もとの形のまゝで今日も使用されて居るものでありませう。

サ行變化の語は知的な働き、一つの狀態から他の狀態への變化、または中間のものを使用する働きを表はし、四段變化の語よりも後にできたものでありませう。

日本語の働きの語としては四段變化の語が一番早い時にでき、上二段・下二段變化の語などが後からでき、サ行變化の語が一番新らしいものであるとすれば、この順序を變化することはできません。古い日本語を特別に愛する人は、四段變化の語を働きの語の基礎とすることを望むでせう。しかし、その結果は千年以前の社會生活、または幼い人々の生活を表すには便利であつて、直接で單純な働きばかりを表すことはできるが、知的であり、複雜である働きを表すには不適當になります。今日また明日の生活をいひ表し、また知的な働きを表はすためにはサ行變化の働きの語を基礎とすることが正しいと思ひます。

書く　と　記錄する

飛ぶ　と　飛行する

聞く　と　聽取する

思ふ　と　思想する

いふ　と　發言する

などは異なる意味であります。書くは「搔く」・「抓く」・「缺く」と同じく、もとは木や石などの表面に跡を附ける働きであり、記錄するとは後々までも書き留めて置くことを意味し、「飛行」といへば空を飛ぶ機械を考への中に入れ、「鳥が飛行する」といふと不調和を感じます。「聽取」・「發言」といへば重々しい、またはきびしい態度や、その內容などを考へます。

右にいつた考へにより私は五十ばかりの、サ行變化ではない働きの語を取り入れました。しかし次のやうなし方によれば働きの語の數は『する・なる・もつ・行く・置く』のやうな、この上もなく單純な二十ばかりになります。

思ふ——考へになる

知る——知識をもつ

書く——書きものをする

飛ぶ——空を行く

泳ぐ——泳ぎをする

買ふ——買ひものをする

出す——そとへ置く

入る——うちへ行く

このやうに働きの語を名の語にして使用することは西洋の人には便利でせうが、日本人にはその必要がありません。故に私は基礎語を標準語からあまり遠く離れぬやうにして、五十あまりの不規則變化の語を留めて置きました。

四　文　例

私は讀み方の論に入る前に、私の試みである基礎日本語の文體の例を出して置きませう。第一の文例は家のうちの親しい人々の話す言葉、第二は社會のでき事を書いたもの、第三は文學的な文章、第四は歴史的な、また思想を表はす文章、第五は科學的な文章であります。

1　電　信

「父上、電信が來ました。」

「さやうですか。讀んで下さい。」

「『ハナシデキタイツクルヘンヤス』と書いてあります。」

「安吉からです。それでは私は明日の一番汽車で行きませう。」

「父上、ヘンとは何のことですか。」

「答へを下さいといふことです。それを作つて下さい。」

「ミヤウニチノアサ一バンノキシヤデユキマス。」

「それでは文章が長過ぎます。電信にはできる限り短い文章がよいのです。今すこし短かくして下さい。」

「ミヤウヒ一バンキシヤデユキマス。」
「それで幾字になりますか。」
「十五字です。」
「十五字までは三十錢ですが、濁りのある字は一字を二字に勘定されますから、それでは十七字になります。十五字までにして下さい。」
「ミヤウ一バンデユキマス。」
「それでもよいのですが、電信には尊敬の語を使用しなくてもよいのです。今すこし考へて見なさい。」
「ミヤウ一バンデユク。」
「それでようございます。それで十一字ですから私が賣り買ひをする時に使用する家の名「カネキ」を入れて電信の紙に書いて下さい。」

2　一太郎

日本とロシヤとが戰ひをして居つた時のことであります。軍隊の人々が乘つて居る船が今港を離れやうとして居つたその時、
「ごめんなさい、ごめんなさい。」
といひいひ、見送る人々を押して通つて、前へ出る老いた女がありました。齢は六十四五でもありませうか、腰にち

ひさい包を結び附けて居りました。軍隊の乘つて居る船を見ると、

「一太郎。その船に乘つて居るなら銃をあげなさい。」

とおほきな聲でいひました。船の上で銃を高くあげたものがあります。老いた女はまたおほきな聲でいひました。

「家のことは心配しないで下さい。天皇樣によくお仕へなさい。了解したなら、また銃をあげなさい。」

また銃を高くあげたことが、遠くぼんやり目に入りました。老いた女は「これで心が輕くなりました」といつて、そこで腰を地に附けて休みました。聞けばその日の朝から二十キロメートルの山道を草で作つた穿きものを穿いて早足で來たといふことです。そのところの役人の頭を初め、見送りの人々は誰も泣かない人はなかつたといひます。

3　羽の着もの

遠い過去の話であります。一人の魚を取ることを毎日の仕事として居るものが、

「今日は何といふよい天氣でせう」といひながら、みほの松原を通つて居りました。日はよく輝いて、ふじの山は他の日よりもなほ美しう見えました。風は靜かで、波も音がしません。海の廣いおもてはかすかに見えて、空と水とが一體となつたかのやうでありました。

非常に眺めがよいので、魚を取る男はぼんやりと海を見て居りましたが、どこからかよい匂ひがして來ましたので、上を見ますと、松の木に美しいものが懸つて居りました。そばへゆき、見ますと、見たこともない美しい着ものでありました。

「これはよいものである、もつてゆき、子の子の末までも蓄へて置くべき家のもちものとしませう。」
といつて、もつて還らうとしますと、見たこともない美しい女が來ました。
「それは私の着ものであります。」
「いゝえ、これは私が今こゝで見附けて取つたものです。もつて還つて、子の子の末までも家のもちものにしませう。」
「いゝえ、それは、空の國の人々の羽の着ものといふもので、この世界の人々には必要のないものであります。」
「さやうなものならばなほ還してあげることができません。日本の國の後々までのもちものとしませう。」
「それがなくては空の國へ還ることができません。どうぞ、それを私に還して下さい。」
魚取りの男はしかしそれをかの女に還さうとしませんでした。空の國の女は悲しげに、目は露をもつて、空を眺めてゐました。
魚取りの男も同じ心もちになつて、
「あまりに悲しいやうでありますから、これを還してあげます。その代りに空の國の踊りを見せて下さい。」
「それで空の國へ還ることができます。あなたの親切の報ひとして踊りをしませう。その羽の着ものを下さい。」
「いゝえ、いゝえ、あなたがこれを受け取れば、踊りをせずに空の國へと行くのでせう。」
「いゝえ、空の國の人々には僞りはありません。」
「あゝ、私は恥になることをいひました。」
魚取りの男から羽の着ものを受取りますと、空の國の女はそれを着て、空の國の踊りをしました。羽の着ものゝ袖

りをしながら松の木の多くある上を段々高く上へ行き、ふじの山よりも高い空へ入つて行きました。

は輕く風を受けて空に流れ、その色は日の光に輝きました。魚取りの男がぼんやりと眺めて居りますと、空の女は踊

4　孔　子

支那數千年間の人の中で、一番賢く完全な人として、長く後々の人に尊敬を受け、德の影響の今になほおほきいのは孔子が第一であります。孔子は今から二千五百年ばかり前、その時の魯の國、今の山東省の地に生れました。若い時から學に力を入れ、おほきくなつて後魯の役人となり、非常によい政治の結果を見せましたが、わるい心の人から妨げを受け、長くその位置に居ることができず、魯の國を去つて行きました。その頃支那は數國になつて、たがひに爭ひ、戰ひがいつもありましたが、孔子は非常にこれを心配し、いかにかして國を平和にし、すべての人の苦みをなくしようと、廣く國々を旅して、公の仕事をする役を與へられるやう願をしました。しかしいつまでも志しを得ることができなかつた故、老いて後は教育と本を書くことに力を入れました。孔子の教を受けた人は三千人で、そのうち非常に優れて居つたのは顏淵・曾參・有若等七十二人でありました。

論語は曾參と有若等が孔子とその教を受けた優れた人々の言葉と行ひとを書き留めたもので、一番よく孔子の性格を見ることができます。今この本よりその一部分を紹介しませう。

孔子は正しいことを愛する心の強い人でありました。彼はいひました。「多くの財產と高い位置とは人々の希望するところであります。しかし正しい道でなければ私はそれを願ひとしません。財產がなく位置の低いことは人々の嫌ひ

とすることであります。然し正しい道によつてそれを避けられねば、私はそれを避けません」と。
孔子はいつも調和と平均とを得たことを最もよいとし、「過ぎることと足らぬことのないのは一番優れた徳である。過ぎることは足らぬことに等しい」といひました。また非常に學を愛し、學をしようとする志しが強くて、「朝に正しい行ひの道を聞くことができれば晩に生命をなくしてよい」といつたほどでありました。
孔子は他の人々を正しくする前に自身を正しく、近いところから遠いところへ影響を與へることを主義として居りました。「自身を正しくして他の人々をよくする」とは彼が短くはつきりとこの考へを表した言葉であります。

5　日

地球の上にあるもので日の影響を受けぬものは全くありません。もし日の光と熱とがないならば、私等またあらゆる生命のあるものは居ることができません。
これほど私等におほきい關係のある日とは何のやうなものでありませうか。短くいひますと、白くなるまで熱した狀態にある一個のおほきい火の球で、これを形作つて居るものは液體に近いガス體であるとのことであります。そしてその端から端までの直線の長さは百二十一萬六千キロメートルで、地球のそれの百九倍あまりであり、その球體としてのおほきさは地球の百三十萬倍に等しく、熱度は表面では六千度ばかり、うちになるほど高くなります。光の强さは考へも届かぬほどで、これを明るさの單位でいふと十三の下に零を二十六も附けて表さねばなりません。
遠くを見る眼鏡で見ると、日の表面はすべての部分が等しい輝きをもつて居るのではなく、光の强い部分もあれば

弱い部分もあり、またところどころに「黑い點」といふ黑く見えるところもあります。この「黑い點」は表面にできる渦卷であるらしく、その數とおほきさは十一年あまりの時を置いて多くなりまた減じます。

しかしこのおほきな日も、夜の空に銀の砂を置いたやうに見えるちひさな星と同じものだといひます。空の世界には私等の日のほかにこれと同じやうなものが數に限りなくあるが、ただその遠いところにあるために、このやうにちいさく見えるのであります。私等に一番近い日でさへ地球からは一億五千二百萬キロメートルも遠くにあります。今もし一時間二百キロメートルの速さで空を飛ぶ機械に乘つて行くとしたならば、日のところにまでゆくには八十七年の時が必要であります。

五　漢字の讀み方

一日はイチニチ・イチジツ・ヒトヒと讀みます。二日はニニチ・フツカと讀みます。そしてヒトカまたはフツヒと讀む時には笑はれます。人はニン・ジン・ヒトと讀むが、一人と書いてイチニン・ヒトリ、二人と書いてニニン・フタリ、と讀み、人數を勘定する時にはヒトリ・フタリ・サンニン・ヨニンのやうにいひます。私等は『伊達・桑折・越河』のやうなところの名、また多くの人の名をいかに讀むべきかを知りません。漢字で書いた日本語ほど讀み方のむづかしいものは世界のうちにないのでせう。私等の祖先は一千年間この漢字の讀み方に關係しては整理の試みもしなかつたやうであります。そして今日では非常な不利益を受けることなしには整理ができなくなりました。

音(おと)——音樂

話（はなし）　電話

常（つね）――非常

味（あぢ）――意味

上（うへ）――上品――上(あ)げる

新らしい――新聞

うち　內容

國（くに）　國際

のやうな例に於いては『音・話・常・味・上・新・內・國』を二個の異なる語として敎へられねばなりません。私は基礎語のうちへ

人(ひと)――人(にん)

時(とき)――時(じ)

おほきい――大(だい)

ちひさい――小(せう)

日(ひ)――日(にち)

月(つき)――月(ぐわつ)

分(ふん)――分(ぶん)

今（いま）——今（こん）

のやうに、同じ語を二個取り入れることを避けることができませんでした。

數の指定も單純ではありません。

家二は　家二軒

犬二は　犬二匹

鳥二は　鳥二羽

本二は　本二冊、または二卷

舟二は　舟二艘

木二は　木二本

車二は　車二輛

織物二は　織物二反

のやうに品ものにより、すべて異なつて居ります。私は個體をもつて居るものには「二個の舟」・「二個の車」・「二個の犬」のやうに一般に「個」を使用し、部分を作つて居るものには「二部の本」・「織物二部」のやうに一般に「部」を使用し、種類の異なるものは「二種の學説」のやうに「種」を使用し、多くの場合に於ては一（いち）・二（に）・三（さん）・四（し）・五（ご）……の讀み方のみを與へ、數字のみを使用することによつて單純にし、また「二人の女」・「二壜の酒」・「二度の説明」・「二筋の川」・「二切の織物」・「二番」のやうな語も使用しました。これを短くいひますと、漢字の讀み方に關係しては、今日の狀態では

整理の基礎を得ることもたやすくありません。

六　基礎語の選擇

基礎語を選擇するには三種類のし方を使用しました。第一に私等の生活に一番必要な、または親しみが深く、使用される度數の多い語を取るべきでありませう。鑛物のうちから『金・銀・銅・鐵・眞鍮・アルミニウム・石炭』等を選擇し、動物のうちからは『牛・馬・豚・鷄・蠶・犬・猫』等を取つたのはこの見方からであります。

第二には「體」・「人」・「住居」・「着もの」・「道具」・「家の道具」・「食するもの」・「飲むもの」……のやうに四十あまりの題を置き、その下に分類されるべき多くの語の一々が必要であるか、必要でないかを考へることでありました。一例をとりますと、「體」といふ題については『頭・毛・腦・顏・目・鼻・耳・頤・口・唇・舌・齒・腕・手・指・爪・喉・頸・心臟・胸・腹・膝・足・骨・神經・皮・筋・肉』、そして人間の肉體には附屬せぬが『尾・翼・羽・角』などの語がなくてはならぬ基礎の語であると考へられます。

髪は「頭の毛」
鬚は「頤の毛」
眉は「目の上の毛」
睫は「目のまはりの毛」
額は「目の上」・「顏の上の方」

頬は「顔の横の部分」・「横顔」
瞼を閉ぢては「目を閉ぢて」
門齒・前齒(ぜんし)は「前齒(まへは)」
犬齒は「鋭い齒」
臼齒は「うしろの齒」
智齒は「齢を取つてからできる齒」
義齒は「作つた齒」・「金齒」・「銀齒」など
乳齒は「母の乳を飲む頃の齒」
蟲齒は、蟲といふ語は基礎語のうちにあるけれども「不健康な齒」・「痛む齒」
眺めるは「長く見る」・「遠くを見る」
望むは「遠くから見る」・「對する」・「願ひをもつ」

のやうにもいひ表すことができます。このやうな考への結果として『髮・鬚・眉・頬……』などの語が基礎語の表から省略されたのであります。

選擇の第三の標準は言葉の經濟・應用の範圍に關係してゞあります。

—歸る——人その他生命のあるものゝ自動的な働き、
—還る・還す——人にも、ものにも、歸る・戻る・返すなどの意味に使用する。

髪　(上の毛の「かみ」よりできた語か)――人の頭の毛。

毛
- (1) 髪
- (2) 頭ばかりでなく、他のところにもある毛
- (3) 動物の皮の被ひになるもの(「毛皮」・「毛もの」・「毛蟲」・「毛絲」)などの語もできる。
- (4) 植物の葉や實や蟲にもある毛のやうなもの。

からだ――人の肉體

たい
- (1) からだ
- (2) 『肉體・團體・液體・ガス體・大體・文體・死體』のやうな合せ字ができる。

あたま――(1) 頭(動物の顔より上の部分)

かしら
- (1) 頭
- (2) 人々の上に立つ人
- (3) 順序の第一、例『頭文字』

これによつても「毛」「還る」「體」「頭」を基礎語として選擇することが利益であることが了解されませう。

右に説明した三種の標準により私は基礎語として次の一千語を選擇しました。

七　基礎語分類表

基礎日本語表

體　體―頭―毛―顏―目―耳―鼻―口―唇―舌―齒―頤―喉―頸―胸―腹―手―指―爪―腰―膝―足―腦―神經
心臟―肺―胃　肉―血―骨―皮―筋　角―翼―羽―尾　**人**　人　男―女　天皇―皇后　王　祖先―父―母―子　をぢ
―をば　兄―姉―弟―妹―夫人　相手　主　友　客　**住居**　住居　家　屋根　戸　階　室　窓　壁　柱　床　疊　欄
庭　門　便所　**着もの**　服　帶　袖　袴　羽織　帽子　外套　足袋　靴　紐　ポケット　カラ　シャツ　ボタン　**道**
具　道具　櫛　刷毛　時計　鎖　眼鏡　紙　筆　ペン　ペンシル　墨　インキ　ナイフ　傘　籠　袋　かばん　陶器
壜　針　鋼　鋏　鎌　杖　鞭　梯子　ねぢ　釘　棒　包　枠　刀　網　ベル　**家の道具**　簞笥　箱　鍵　机　床　膳
箸　皿　蓋　鍋　盥　バケツ　**食するもの**　米―麥―豆―芋―野菜　砂糖―鹽―蜜　卵　果物　菓子　飯　パン　バ
タ　蜜柑　葡萄　林檎　桃　苺　**飲むもの**　汁　乳　茶　コーヒー　酒　ビール　ソーダ　煙草　**自然**　自然　世界
空　日―月―星　元素　空氣　風　天氣　火―焰―熱　光―輝―明　電氣　雷　水―液―蒸氣―雲―霧―雨―露―雪
―氷―湯―流れ　波　ガス　煙　塵　砂　生命　**地の表面**　地　陸　海　山　野　土　田　畑　市　町　田舍　道
橋　川　港　井戸　石　穴　**鑛物**　鑛物　金屬　金　銀　玉　鐵　銅　眞鍮　アルミニユウム　石炭　石油　**植物**
植物　木―幹―根―枝―莖―葉―種―芽―蕾―花―實　板　松　麻　櫻　竹　草　ばら　苔　黴菌　**動物**　動物　性
牝―牡　鳥　魚　蟲　貝　牛　馬　豚　鷄　蠶　犬　猫　蜂　蝶　蟻　蚊　鼠　蠅　蛇　**數と量**　數　量　單位　個
度　ペイヂ　圓　錢　メートル　リツトル　グラム　キロ　倍　分　減　〇　半　一　二　三　四　五　六　七　八
九　十　百　千　萬　億　**時**　時　齡　頃　今―過去―後　晝―夜　朝―晩　昨日―明日　暦　春―夏―秋―冬　年

―月―週―日 時―分―秒 いつ 常 屢 かつて **形** 形 型 姿 大―中―小 おほきい―ちいさい 面―線―平行―角―點 輪 球 渦巻 圓 平 傾斜 段 **位置** 位置 ところ 初―間―終 基礎―頂 中心―圍―まはり―緣 東―西―南―北 うち―そと―右―左 前―後―上―下 縱―横 行―列 おもて―裏 近―遠 そば―離れ **關係** 關係 對 絶對 附屬 範圍 限り 界 たがひ 番 方 部 順序 もと―末―端 次 **色** 色 赤 黄 綠 青 紫 白 黒 暗い 柄 **機械** 機械 仕掛 車 ポンプ パイプ 寫眞 船 帆 砲 銃 **工業** 工業 煉瓦 せめんと コンクリート コルク ガソリン ガラス 絹 糸 綿 糊 蠟 酸 油 しやぼん 炭 建築 工場 **組織** 組織 體系 國 縣 村 軍隊 警察 團體 クラブ 會社 家庭 **知識** 知識 法則 學 學校 教育 勉強 書く 讀み 教へ 言葉 文 語 字 假名 記錄 本 辭書 劇 繪 小說 論 藝術 科學 醫術 歷史 地理 經濟 物理 化學 心理 圖書館 博物館 **社會と文化** 社會 文化 宗教 神 佛 農業 保險 財產 かね 銀行 植民 税 政治 役 裁判 道理 風俗 習慣 德 罪 罰 規則 法律 權威 權利 義務 新聞 ラヂオ 印刷 廣告 映畫 舞臺 外交 聯盟 國際 **音樂** 音 聲 音樂 歌 うたふ 蓄音機 **通信** 通信 郵便 ハガキ 切手 電話 電信 **旅** 旅 汽車 停車場 切符 ホテル 宿 **心** 心 意識 感じ 衝動 感覺 感情 意志 態度 主觀 客觀 觀念 記憶 主義 思ひ 考へ 想像 企て 愛 好み 興味 欲 憎しみ 悔み こだわり 苦み 嫌ひ 怒り 恥 志し 望み 願ひ 喜び 樂み 滿足 慰み 悲しみ 驚き 恐れ **心の働き** 見る 聞く 注意 知る 眺め 了解 經驗 試み 觀察 考案 比較 判斷 應用 發見 發明 提案 計畫 選擇 反對 贊成 疑ひ 說明 心配 遠慮 信 僞り **行ひ** 行ひ 忠 孝 尊敬 いふ 表し 話 讀る 問ひ―答へ

泣く—笑ひ　戯れ　作る　遊び　改め　遇ふ　別れ　集り　避る　誘ひ　與へ　もらふ　届け　貸し　送り—待つ　結
勧め　使用　頼み　仕へ　從へ　催し　装飾　洗ふ　用意　省略　拂ひ　手術　聯絡　交換　代り　案内　紹介　結
婚　料理　馳走　代表　責任　助け　制　調節　整理　支配　指導　蓄へ　預け　所有　仕事　勤め　成功　失敗
守り　妨け　害　爭ひ　攻撃　戰ひ　盗み　報ひ　挨拶　形容　計り　添へ　合せ　繋ぎ　勘定　賣る　買ふ　定め
慣れ　倦きる　疲れ　忘れ　眠り　休み　**肉體の働き**　働き　居る　する　留め　去る　置き　止め　乘り　得る
あげる　取る　もつ　握り　打ち　卷き　受け　觸れる　折り　振り　切れ　息　食　味　吸ひ　嗅ぐ　咳き　飲み
噛む　立ち　起き　行き　來る　還り　歩み　走り　通り　蹴る　踊り　越る　出す　入る　引き　押し　附け　磨
き　飛び　泳ぎ　穿く　着る　織る　**自然の働き**　運動　影響　變化　流行　結果　刺戟　縮り—綏み　解け　接
摩擦　爆發　破壞　碎け　匂ひ　捩れ　辷り　懸り　沸き　生れ　ある　なる　できる　**狀態**　狀態　同じ—等し—
異なる　正しい—誤り　滿た—虚　單純—複　重なる　混じた　高い—低い　廉い　廣い—狹い　深い—淺い　重い
—輕い　安全—危險　厚い—薄い　長い—短い—直—曲り　老い—若い　幼い　親しい—疎い　肥た—瘠た　健康—
病氣　富んだ—貧しい　強い—弱い　優た—劣る　堅い—しなやか　痛い　痒い　鋭い—鈍い　荒い—柔か　滑か
早い—おそい　多い—稀　暑い—寒い　暖い—冷しい　乾いた—濕つた　清い—濁り　穢れ　汚れ　はつきり—ぼん
やり　開いた—閉ぢた　騒ぎ—靜か　新らしい—古い　公け—秘密　むづかしい—たやすい　偶然　突然　確か　必要
利益　便利　幸　めでたい　自由　適當　平均　充分　完全　足る　過ぎる　あまり　朗か　調和　平和　上品　ゆ
かしい　きびしい　精密　微妙　**性質**　性質　性格　よい—わるい　親切—殘酷　美い—醜い　賢い—愚　甘い—苦

い 淡白—しつこい 薬—毒 誠 まじめ **一般** 内容 意味 實質 こと 名 もの 品 一般 特別 普通 種類 例題 科目 細目 表 章 印 標準 力 目的 傾向 價 **雜** 雜 群 旗 刃 カード 軌道 跡 影 灰 粉 粒 漢 西洋 **名の代り** 私 あなた 彼 それ 自身 他 これ ここ あれ 誰 何 どこ **關係を表はす語** て で の に を は も や か へ 於て やう ほど ばかり 故 から より さへ ついて 以つて 共 まま まで **繋ぎの語** そして しかし また あるひは と が もし—ならば ながら ため **添への語** あらゆる 或る いいえ いかに いくらか かすか さやう 實際 すこし すべて ただ どうぞ 必ず なほ 非常 殆んど 全く わづか **語の頭に添へる語** お 第 幾 不 今 毎 自働 **語の尾に添へる語** 様 君 等 など らしい たい ます ない ぬ 下さい ございます べき 人 場 所 局 的 **挨拶** もし もし 有難う ごめん 左様なら

八 合せの語

基礎日本語の數は一千であるが、それを重ね合せると數倍になります。例、

大 大-部 大-地 大-部-分 大-體 大-學 大-砲

文 文-章 文-體 文-學 文-語 文-語-體 說明-文 論-文

複 複-數 複-雜 複-線 複-文 複-本

間 間-接 直-接 接-する

不　不－案内　不－完全　不－便利　不－調和　不－忠　不－注意　その他

重ね合せの語は、その一々の語がもとの意味をなくすることなく、基礎語を知つて居れば、自然に重ね合された語の意味が了解される範圍に留めることが必要であると考へます。それ故に

蟲－齒、朝－顏（草花の名）、朝－庭（これは讀み方が異なります）、一－番－目、讀－本（讀－本ならば基礎語）などは基礎語としては作り得ないのであります。

一千語の基礎日本語を以つていかに多くのことがいひ表はされるかは勘定することはできないが、辭書にある語は大部分基礎語でいひ表すことができます。「大日本國語辭典」から今日普通に使用される語をとり、基礎語で表して見ると、

あーくとう　非常に光の强い電氣の明り。

あゝち　上の部分が卵型の曲線をした門または建築の入口。

あーとぺーぱー　繪を印刷するに使用する西洋の紙。

あーめん　誠に。

あゝ（副）　あのやうに。

あゝ（嗚呼）　感じを表す自然の聲。

あい（愛）　基礎語。

あいいく（愛育）　愛しておほきくなるやうにする。

あいおん（哀音） 悲しみの聲。
あいかう（愛好） 愛し好むこと。
あいきふ（哀泣） 悲しみ泣くこと。
あいきやう（愛敬） 愛らしさ、顔に愛らしさを見せること。
あいきやうげ（愛敬毛） 全體から離れて顔に懸り、女の愛らしさを増す毛。
あいぎん（愛吟） 愛して讀む歌。
あいくるし 愛らしい。
あいぐわん（愛玩） 愛して慰み（もの）にすること。
あいぐわん（哀願） 悲しい心で願ひをすること。
あいけう（愛嬌） 愛らしい。
あいげう（愛樂） 愛し好むこと。
あいこ（愛顧） 愛して幸を與へること。引き立てること。
あいこく（愛國） 國を愛すること。
あいこくしん（愛國心） 國を愛する心。
あいさう（愛想） 人に對して愛らしくすること。
あいさうづかし（愛想盡） 人に對し愛の感情をなくすること。人の感情をわるくするやうな言葉をいひ、行ひをす

ること。

あいさつ（挨拶） 基礎語。

あいさつにん（挨拶―人） 基礎語、

あいし（愛子） 愛する子。

あいじ（愛兒） 愛する子。

あいしふ（愛執） 止めやうとして止められぬ愛の感情。

あいしやう（哀傷） 人の死を悲しむこと。

あいじやう（愛情） 愛の感情。

あいしゆ（愛酒） 酒を好むこと。

あいじゆつ（愛恤） 不幸な人を愛してものを與へること。

あいしん（愛心） 愛する心。

あいす（愛す） 基礎語 愛―する。

あいすくりーむ 卵、砂糖、牛の乳に匂ひを添へ氷にした菓子。

あいせき（愛惜） 強く愛すること。

あいせき（哀惜） 人の死を悲しむこと。

あいせふ（愛妾） 夫人とせずに愛する女。

あいぜん（藹然）　柔かな心もち。

あいそ（哀訴）　悲しい心をいひ表はして裁判を願ふこと。

あいぞう（愛憎）　愛と憎しみ。

あいた　あゝ痛い。

あいたい（靉靆）　雲の空に流れてゐる姿。

あいたう（哀悼）　人の死を悲しむこと。

あいたしゆぎ（愛他主義）　他人を愛することを行ひの基礎とする主義。

あいぢやく（愛著）　愛する心から離れ得ぬこと。

あいつ（彼奴）　彼、あれ。

あいつう（哀痛）　強く悲しむこと。

あいどう（哀慟）　悲しみ泣くこと。

あいなし（愛無）　愛らしさのないこと。

あいにく（生憎）　時がわるく、なり行きがわるく。

あいぬ　北海道に住居する人種の名。

あいば（愛馬）　愛する馬。

あいぶ（愛撫）　愛して親しくすること。

あいべつ（愛別） 愛して居る人と別れること。
あいぼ（愛慕） 愛して離れぬやうに願ふこと。
あいまい（曖昧） はつきりせぬこと、ぼんやりしたこと。
あいよく（愛欲） 愛して自身のものにせんとする心。
あいらく（哀樂） 悲しみと樂しみ。
あいらし 基礎語、愛―らしい。
あいらしさ 愛らしいこと。
あいれん（愛戀） 愛すること。
あいれん（哀憐） 他人の身の上を悲しく思ひ、愛すること。
あいれん（愛憐） 愛すること。
あいろ（隘路） 狹い道。

右のやうに辭書にある語は殆んどすべて基礎語でいひ表はすことができます。右の例は說明を主としたがために、長々しくなりましたが、文章のうちでは遙かに短かく、單純に基礎語とすることができるのであります。辭書にある語の殆んどすべてを基礎語でいひ表はすことができるとすれば、日々の生活の普通のことは殆んどすべて基礎語でいひ表はし得ることが了解されませう。一般の人々が基礎日本語で何ごとでも自由にいひ表す文章を書き得るやうにするためにはこのやうな辭書を作ることが必要であります。

九　基礎日本語の目的

これまで說明して來たやうに、この基礎日本語はできる限り單純な、しかし、何事でもはつきりといひ表し得る、整理された、また記憶することがたやすい、日本語を組織することを目的とした試みであります。私は數の限りもない語のうちから意味の重なつた語を省略し、同じことを表すに五六種もあるいひ方のうちから一種のいひ方を取つて滿足することゝし、應用の範圍の廣い、そして實際に使用されて居る語を選擇しました。そしてわづかに一千語を以つて、普通のことは何でもいひ表すことができるやうにしました。そのすべての語は紙の一ペイヂに印刷することができます。音が同じで意味の異なる語をできる限り使用せぬやうにし、一語に二種の讀み方を與へず、働きを表す語はできる限り「し・する・すれ」と尾の部分が變化する語を選擇し、また書く文章と話をする文章とを全く同じにしましたので、幼い時から日本語に慣れぬ人々も、たやすく了解し、また使用することができ、ローマ字で書いても不確になる點がなく、はつきりとたやすく了解されます。

この基礎日本語は主として次の五種の目的を以つて考案されたのであります。

一　この基礎語はわづかに一千語である故に小學校の五六年間に完全に讀み書きができるやうになると思ひます。それができますと、基礎日本語を以つて書かれ、或はラヂオなどで話をすると、小學校の敎育を受けた人々であれば、言葉のむづかしさにより妨げを受けることなく、何でも了解し得るやうになりませう。基礎日本語を使用するならば、年々變化し、月々新しくなつて行く社會のうちに生活するに必要な知識を日本の國の殆んどすべての人々に與へるこ

とができるやうになりませう。今日では言葉のむづかしさに妨げられて、わづかの人しかこのやうな知識を與へられて居りません。

二　朝鮮や臺灣の人々に日本語を教へることが非常にむづかしいといはれて居ります。これから滿洲でも日本語を教へることが必要になりませう。その時、自然のまゝの、整理されない日本語を以つてするならば、また失敗するのではないかと心配されます。整理され、記憶することがたやすくされた基礎日本語を以つてしたならば、日本語を廣めることに成功することもでき、日本の人々と朝鮮・臺灣・滿洲などに生れた人々とが直接に話もできるやうになり、心と心との親しい了解もできるかと思ひます。

三　ヨーロッパやアメリカの人々に對しても日本語は非常にむづかしい言葉であるといはれて居ります。彼等のうちで日本語で話のできるのは、長く日本に居る人に殆んど限られて居ります。それ等の人々の日本語も完全な文章にならず、幼い人の言葉のやうに切々の言葉であることが多いのであります。日本語を讀み書きすることはよりむづかしいとされて居ります。その故は「日」がジツ・ニチ・ヒ・カのやうに讀まれ、一文字に三四種の讀み方があつて、いつ、いかに讀むべきか判斷がむづかしく、語の變化の規則があまりに複雜であり、書く言葉と話す言葉とがあまりに異なつて居り、また同じ内容をいひ表すのに五六種よりも多くのいひ方があるからであります。基礎日本語はこれ等のむづかしさをなくして、日本語を東洋に於ける國際的な言葉とし、多くの國の人々もたやすく話し、また書くやうにすることが目的であります。

四　ローマ字を使用することも漢語のむづかしさから離れて、日本の言葉の讀み書きと印刷とをたやすくせんため

であります。基礎日本語も同じ目的をもつて居ります。ローマ字を使用するためにも、同じ音で異なる意味の語、聞き慣れぬ、目で見なければ了解することのできぬ語は避けねばなりません。基礎日本語はこの選擇を充分にしてある故に、ローマ字で表しても、ラヂオで話しても、たやすく了解されませう。

五 基礎日本語は幼い人々が文章を作る時に一種のよい教育を與へ得ると思ひます。むづかしい漢語を多く使用した文章は高い教育を受けた人でなければ了解されません。その結果としてむづかしい文字を使用することが高い教育を受けた印であり、むづかしい文字を使用すると內容までも優れて、深い意味があるやうに見えるとの誤つた考をもたすことがあります。これに對し基礎日本語は、同じ內容をいひ表す文章のうちで、より單純な、たやすい方がよい誠のものであること、人々のためになることはできる限り多くの人に讀まれる、たやすい文章で書くべきであるとの考へを與へます。またわづか一千語でも完全に了解し、それらの言葉を正しく使用して、思ふことを單純に、誠の心を以つて、はつきりいひ表はし得るやうにすることは、一萬語をぼんやりと記憶し、多くの誤りをしながら、裝飾した言葉で、誠の心とは異なることを書くやうにするよりは、優れた教育であると信じます。

このやうな實際の使用と、教育の助けとなることが、基礎日本語の主なる目的でありますが、次に基礎日本語が目的として居らぬ二三の點をはつきりさせて置きたいと思ひます。

一 基礎日本語は普通の日本語を初めて勉強する人に對して基礎、または階段となるべきものであつて、いつまでも基礎日本語にこだはりをもつて、一千語の範圍を守る必要はありません。彼等のためには基礎日本語は普通の日本語のうちに解けてなくなつてもよいものであります。またこゝに選擇された一千語の他の語は必要のない語であると

考へることも誤りであります。彼等は記憶し得る限り多くの語を記憶し、正しく使用し得るやうにならねばなりません。普通の日本人は數千、または數萬の語を使用して居ります。基礎日本語は日本語の知識の優れた律策を作る人々のために堅いよい基礎となれば目的が完全に得られたのであります。選擇された一千語の範圍を守ることはたゞ基礎日本語を勉强する人々のために話をし、本を書く人、小學教育を受けた日本人の大部分をなす人々に對して話をし、また本を書く人に限つて必要であります。高い教育と理解のある人々に對して基礎日本語はたゞ數時間の勉强で組織が了解され、語表を目の前に置けば自由に千語を使用することができませう。

二　基礎日本語は微妙なことをいひ表はすために考案されたのではなく、實際の使用に便利であること、普通のこと柄の大體をはつきりといひ表すことを目的として居ります、基礎日本語は小說や劇や歌の言葉としては不適當であります。科學や法律などにはその範圍のうちでばかり使用される特別な語があります。これらの必要な語を添へるならば基礎日本語は科學や法律の言葉となることができると思ひます。

使用する語を一千に限ると實際に不自由と不便利とを感じます。慣れぬ人は特別に不自由を感じるでありませう。またいひ表し方が不完全にもなります。それ故に二千語または三千語にすれば完全な基礎日本語ができるのではないかとの考へをもつ人があるかとも思ひます。

しかし二千語または三千語となると短い月日のうちにたやすく記憶し、使用し得るやうになることができません。また一千語よりも多くなるとある語が基礎語であるかないかをも、一々記憶して居ることがむづかしくなります。それを確にするためには基礎語表を常に見なければなりません。そのためにはすべての語を一ペイヂの上に印刷して一

度に見得ることが非常に便利で、また必要なことであります。千五百語・二千語となるとこれもできなくなります。一ペイヂに印刷された語表がなければ基礎日本語ばかりを使用して文書を書くことは非常にむづかしくなりませう。基礎語を一千語に限つたのはこのためであります。（終り）

昭和八年五月二十日印刷
昭和八年五月二十五日發行

國語科學講座
（第一回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者　株式會社　明治書院
代表者　三樹退三

東京市神田區三崎町三丁目八十九番地
印刷者　細谷祐三

發行所　東京市神田錦町一丁目　株式會社　明治書院